様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３３９１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８７０２７７

研究課題名（和文）国際語としての「日本英語」の談話的特徴の分析：コーパス準拠の仮説検証アプローチ

研究課題名（英文）A confirmatory approach to examining discourse characteristics of "Japanese English" as an international language: Corpus-based analysis

研究代表者
藤原　康弘（Fujiwara, Yasuhiro）

名城大学・外国語学部・准教授

研究者番号：９０５８３４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は、日本人英語使用者コーパス（JUCE）等を活用し、先行研究（藤原, 2014）にて確認された国際英語としての「日本英語」の談話的特徴の多層的な追検証を行うことである。アジア人の英語使用者コーパスであるAsian Corpus of English (ACE)の一部のデータの質的分析（Fujiwara, 2014）、日本人以外の学習者コーパスや使用者データの量的かつ質的分析（Fujiwara, 2016）を行った結果、この「内容語依存」や「定型性」の特徴が、日本人の言語特徴を表しているのみならず、広範囲の第二言語使用者全体に同定し得る特徴でもある可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research project was to analyze discourse characteristics of English used by L2 writers, with a focus on nominalization and explicitness by means of the repetition of the same nouns. One of my previous studies revealed that Japanese writers of English prefer to use content nouns with definite articles, and have a tendency to repeat the same noun phrases for reference maintenance. The results were recognized as L1 transfer since the Japanese language is more noun-based, has no equivalent system of pronouns, and allows frequent repetition of the same words in comparison to English. The repeated use of the same nouns was, however, also detected in other Asian learner and user corpora, and therefore this discourse feature may be a shared common property of ELF, English as a lingua franca. To confirm this hypothesis, the collecting of more systematic data and the utilization of further empirical procedures is called for.

研究分野：応用言語学

キーワード：国際英語　「日本英語」　コーパス　談話的特徴　英語教育

１．研究開始当初の背景

20 世紀の言語能力観は概ね単一言語使用主義（monolingualism）に基づき，外国語学習の目標をいわゆる理想化された「ネイティブ・スピーカー」と捉えてきた。しかし 21 世紀のグローバル社会では，より二言語併用主義（bilingualism）や複言語主義（plurilingualism）に軸足を移し，「熟達した言語使用者」（proficient user）を最終的な目標とする，学習者の母語を含めた言語能力観に変わりつつある。

そのパラダイムシフト，および国際英語関連領域とコーパス言語学の学際的領域（藤原, 2012）を主とした理論的基盤とし，申請者は「熟達した言語使用者」といえる日本人英語使用者－「日本語を母語とし，日本で小中高の教育課程を経て，仕事で英語を使用するもの」（藤原 2006, Fujiwara 2007）－による英語テクストを収集する「日本人英語使用者コーパス（JUCE）」編纂プロジェクトを 2005 年より開始した（藤原, 2006; Fujiwara, 2007）。「日本人英語使用者」として，海外派遣の会社員，技術者，研究者，外交官，通訳・翻訳家，またジャーナリストを想定し，今までに報道に使用された英語を中心に編纂が行われ，語彙，談話，語用の側面において一定程度の分析結果を示してきた（藤原, 2014）。

上記の研究にて提示された「日本英語」の主たる潜在的な談話的特徴は次の通りである。

- 日本人英語使用者は内容語に依存し，英語母語話者ほど，機能語を用いない。
- 日本人英語使用者は具体的指示対照が比較的明らかな he，she を使用し，一般的人々を指す用法のある総人称代名詞（e.g., we, you, they）の使用を抑制する傾向にある。
- 日本人英語使用者は母語話者よりも語彙難度の高いものを多用する傾向にある。
- 日本人英語使用者は英語母語話者ほど，縮約形を使用しない。
- 日本人英語使用者は句動詞の使用における抑制傾向がある。

これらの「日本英語」の「定型性」を示唆する特徴が品詞，語彙のマクロな分析で検出されているものの，今後は，可能であれば別データも用いた，よりミクロな追検証が必要とされる。上記は特定の前提を持たず仮説探索的データ分析（exploratory approach）による成果であるため，各項目に明確な焦点を当てて，より計画された言語分析手法，および手順を用いて，仮説検証的データ分析（confirmatory approach）を行う必要がある。この追検証が本研究の主たる課題である。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は，日本人英語使用者コーパス（JUCE）等の各種データを活用し，前述の先行研究（藤原, 2014）にて確認された国際英語としての「日本英語」の談話的特徴の多層的な追検証を行うことである。この研究期間においてはとりわけ「内容語依存」，すなわち日本人英語使用者は内容語に依存し，英語母語話者ほど機能語を用いない特徴と，「定型性」，すなわち同じ語をある程度繰り返し使用する傾向の 2 つに焦点を当てて，研究を実施した。

３．研究の方法

まずアジア人の英語使用者コーパスである Asian Corpus of English（ACE）（Kirkpatrick, 2010）の一部のデータを質的に分析した（Fujiwara, 2014）。

次にアジア人の英語学習者コーパスである International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) (Ishikawa, 2011) を量的に，また他のアジア人の英語使用者データ（電子メール，新聞記事等）を質的に分析を行った（Fujiwara, 2016）。

４．研究成果

(1) ACE の一部のデータを分析した結果，母語が異なる会話の参与者達が，英語によりコミュニケーションを行う際，意図的に同名詞を繰り返し使用して，ディスコース内の参照物を明確に示す傾向が見受けられた（Fujiwara, 2014）。

(2) 上記結果により，藤原（2014, p. 188）でも指摘していたように，この談話的特徴は，日本人英語使用者のみならず，他の英語使用者も共有している可能性が確認できた。そこでデータ分析範囲を他のアジア英語学習者，および英語使用者まで広げて分析を行うこととした。

まずアジア人の英語学習者コーパスである International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) (Ishikawa, 2011) を分析した結果，英語母語話者（アメリカ，イギリス，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドの混合）のグループのみが特異な振る舞いをすることが確認できた。“part time X”という 3 語連鎖を調べた結果，日本，韓国，中国，台湾，インドネシア，タイはおおむね，すべて“part time job”であるが，英語母語話者群のみ，“part time work”を相当量使用すること，また彼らは圧倒的にこのような 3 語連鎖を過小使用していることが確認できた。もちろんその part time job 等の 3 語連鎖の過小使用の背景には，代名詞の過剰使用があると予測できる。

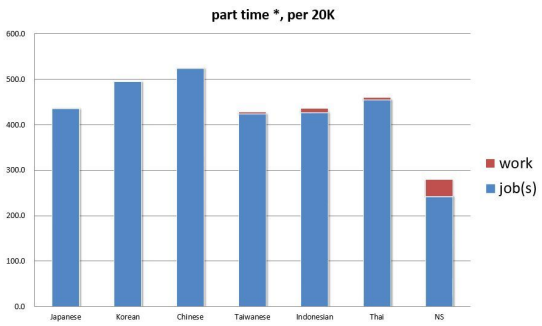

図 1：“ part time X ” の 3 語連鎖の国際比較

また書き手が英語「使用者」であるアジア圏の大学教授による私信やプロのジャーナリストによる新聞記事等を抽出し質的に分析を行った。その結果，同名詞を繰り返し使用する傾向が確認できた。下記の図 2 はその一例である。

Dear Professor Fujiwara,

I'm really glad to hear from you and to know that you are very supportive for the XXX conference. I also invited Professor X and Professor Y to join the conference. Hope you all can come to join the conference, to visit your sister university in Taiwan, and to visit me in Taiwan. Regarding the abstract submission, please notice that the due date is March 15. November is a good time to visit Taiwan. The weather is cool and comfortable since it's close to the end of autumn.

図 2：アジア圏の大学教授による私信
（データ利用の許諾取得済み）

上記の結果をふまえて，この同名詞の繰り返しの使用には，次の 3 つの解釈が可能であると指摘した。

① SLA/EFL 的視点
語彙多様性における「母語話者」レベルの能力の欠如のため

② SLA/WE 的視点
同名詞の繰り返しを許容する母語の転移を背景としたイノベーションのため。

③ ELF 的視点
ELF におけるコミュニケーションでは通じやすいよう明確さが重要であるため

なお SLA では母語話者との不一致を「負の転移」と捉え，マスターレベルにおいても母語らしさが残ることを「化石化」と描写してきたが，実際の国際コミュニケーション上，理解可能であるため，「正の転移」と考えられる（藤原, 2014）。母語話者の英語使用の特徴すべてが，国際的に望ましいわけではない。

上述のように，この「内容語依存」や「定型性」の特徴が，日本人の言語特徴を表しているのみならず，広範囲の第二言語使用者全体に同定し得る特徴でもある可能性が示唆された。

これらの談話的特徴が，世界の多くの英語の第二言語使用者に共通する特徴であるならば，現在の母語話者依存の英語教育へ一石を投じることができよう。つまりこのような記述的研究を蓄積することにより，「国際共通語としての英語」（English as a Lingua Franca）のコミュニケーションに資する一方，現状の無理に英語母語話者の鋳型にはめる単一言語話者ベースの英語教育から，二言語併用者ベースの英語教育への転換を図ることができる。

この視点の展開の重要性においては，2017 年夏出版予定の拙著，『これからの英語教育の話をしよう』所収の拙論，「自律した日本の英語教育へ：国際英語の視点から」も参照いただきたい。

注：なお本報告は主として Fujiwara（2014, 2016）の発表資料に基づく。

参照文献

藤原康弘. (2006).「日本人英語使用者コーパス：JUCE」田畑智司（編）『言語文化共同プロジェクト・電子化言語資料分析研究 2005-2006』(pp. 47-56). 大阪：大阪大学大学院言語文化研究科.

藤原康弘. (2012).「コーパス言語学と国際英語関連分野(EIL，WE，ELF)の学際的領域 ―英語使用者コーパスの必要性―」『外国語研究』45, 21-52.

藤原康弘. (2014).『国際英語としての「日本英語」のコーパス研究―日本の英語教育の目標』ひつじ書房.

Fujiwara, Y. (2007). Compiling a Japanese User Corpus of English. *English Corpus Studies, 14*, 55-64.

Ishikawa, S. (2011). A new horizon in learner corpus studies: The aim of the ICNALE project. In G. Weir, S. Ishikawa, & K. Poonpon (Eds.), *Corpora and language technologies in teaching, learning and research* (pp.3-11). Glasgow, UK: University of Strathclyde Publishing.

Kirkpatrick, A. (2010). Researching English as a lingua franca in Asia: the Asian Corpus of English (ACE) project. *Asian Englishes, 13*(1), 4-19.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① Aoyama, Ryo, & Fujiwara, Yasuhiro, English expressions based on Japanese language and culture for a Japanese pedagogical model in view of English as an international language, Asian English Studies, refereed, 2016, *18*, 43-69.

② **藤原康弘,「国際英語」としての英語の知識：コーパスから見える** World Englishes**,『英語教育』(大修館書店), 査読無,** 2016, *65*, 50-51.

〔学会発表〕（計　3 件）

① Fujiwara, Yasuhiro, A Preliminary Exploration of ACE Japan: Focusing on discourse characteristics. The 7th International Conference of English as a Lingua Franca, The American College of Greece (2014/9/4).

② Fujiwara, Yasuhiro, Nominalization and explicitness in ELF discourses: Language-specific or universal? The 6th Waseda ELF International Workshop, Waseda University (2016/11/12)

③ **藤原康弘,「グローバル時代」の英語：オルタナティブとしての「日本英語」のすすめ，大阪大学**（2016/12/11）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤原　康弘（FUJIWARA, Yasuhiro）
名城大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90583427